

# ブラジル・ポルトガル語における否定表現—文断片で表す「文」否定—

吉野朋子

## I. はじめに

ブラジル・ポルトガル語の口語では、以下の(1a)-(1c)の形式で文否定 (sentential negation) を表すことができる。(1a)-(1c)は、「彼はポルトガル語を話さない」という同じ論理的意味を表す。

- |                                |                       |
|--------------------------------|-----------------------|
| (1) a. Ele não fala português. | (NEG1) 彼はポルトガル語を話さない。 |
| b. Ele não fala português não. | (NEG2)                |
| c. Ele fala português não.     | (NEG3)                |

(1a) は書き言葉でも使う標準的な否定表現で、(1b)と(1c)は口語で使う表現である。(1a)では、動詞の直前に否定辞 *não* を置く。(1b) では、動詞の直前と文末に否定辞 *não* が2回現れるが、二重否定の意味はない。

(1c)では *não* を文末に置く。本稿では、(1a)-(1c)の形式をそれぞれ NEG1、NEG2、NEG3 として表す。Perini (2002: 439)、Furtado da Cunha (2007: 1651) をはじめ多くの研究や文法書が指摘するように、NEG1 と NEG2 で動詞の前に現れる否定辞 *não* は、強勢のある発音[nãw] ではなく、弱化した無強勢の[nũ] の発音になることが多い。<sup>1)</sup> 一方、NEG2・NEG3 の文末否定辞 *não* は、このような音声的弱化は起こらない。

Cavalcante (2012) は、NEG2・NEG3 の文末に現れる否定辞 *não* を同じものと捉え、<sup>2)</sup> NEG1 で動詞の前に現れる否定辞 *não* とは異なるものとして区別をしている。そして、NEG2・NEG3 を含めた、否定辞が否定される要素の右側に現れる形式 ([X NEG]) に関して、カートグラフィック・アプローチ (Cartographic Approach) の枠組みにおける階層化された CP システムの中で分析を行っている。[X NEG] の形式の中には、以下の(2b) 否定断片 (Fragmentos negativos)、(3) Pseudo-Stripping (Bare argument ellipsis)、(4) 否定話題 (Tópicos negativos) がある。<sup>3)</sup>

- |   |                              |
|---|------------------------------|
| (2) a. Você encontrou João na festa ontem?            | 昨日パーティーでジョアンに会ったの?           |
| b. — João não.  | ジョアンには会わなかった。                |
| (3) João leu D. Quixote, (mas) Maria não.             | ジョアンはドンキホーテを読んだが、マリアは読まなかった。 |
| (4) Do general não, (as ordens) vieram do presidente. | 将官からではなく、(命令は) 大統領から来た。      |

これらの構成素否定の形式について、Cavalcante (2012) は、NEG2・NEG3 と同じタイプの統語構造を提案している。<sup>4)</sup> 本稿では、主に NEG3 と構成素否定の特徴を比較しながら、両形式に対して共通の統語構造を仮定できるか検討する。また、口語表現のシンタックスという観点から、NEG3 の統語構造に関して考察する。

## 2. NEG3 の特徴：使用割合・語用論的制約・統語的制約

Schwegler (1991) をはじめとする多くの研究や文法書が指摘するように、NEG3 の使用割合は地域によって異なり、北東部で使用頻度が高い。表1は、口語コーパスで用いられた否定表現の割合を示している。

表 1：口語コーパスにおける否定表現の使用割合

	NEG1	NEG2	NEG3
口語の平均 (Cavalcante 2012: 32)	64-88%	10-33%	1-6%
バイーア州 (北東部) 内陸部 (Cavalcante 2012: 32)	66%	28%	6%
南部 3 州 州都 (Porto Alegre, Curitiba, Florianópolis) の平均 (Goldnadel et al. 2013: 50)	97.5%	2.5%	0%

Goldnadel et al. (2013) は、1980 年代末と 90 年代初めに行われたインタビューに基づく調査であり、ブラジル南部 3 州の州都では、否定文における NEG3 の使用割合はゼロパーセントとしている。一方、Azevedo (2005: 242)、Schwenter (2005) は、3 タイプの否定表現はブラジルの口語で広く使うと記述している。

表 1 から NEG3 の使用割合が低いことが明らかであるが、NEG1 とは異なり NEG3 の使用には語用論的制約と統語論的制約が関係することによる。

語用論的制約に関しては、以下の例で示すように、否定される命題が談話で新しく導入される新情報を表す場合、NEG2 と NEG3 の使用は不適切となる。<sup>5)</sup>

- (5) [speaker walking down the street and suddenly remembers she forgot to turn off the stove]
- a. Nossa! Eu **num** desliguei o fogão! (NEG1) ‘Damn! I didn’t turn off the stove!’
  - b. Nossa! #Eu **num** desliguei o fogão **não**! (NEG2) (Schwenter 2005: 1434)
  - c. Nossa! #Eu desliguei o fogão **não**! (NEG3)

Schwenter (2005) によると、NEG3 の使用は NEG2 が現れる文脈の真部分集合 (proper subset) に制約され、談話で明示的に表される旧情報となる命題を否定する場合に用いられる。その結果として、NEG3 は NEG2 よりも使用可能な文脈は限られることになる。Cavalcante (2012: 41) は、NEG2・NEG3 における文末否定辞は、直前の文脈において明示されるか推論される命題となる先行詞を必要とするという意味で、照応的特徴 (caráter anafórico) をもつとしている。そして、NEG2・NEG3 は、照応的否定 (negação anafórica) を表すとしている。(6)-(8)は、返答、否定命令・禁止、yes-no 疑問文で NEG3 を使用する例である。文脈において明示されるか推論される命題が否定されている。

- (6) 返答： a. Você convidou João para a festa? あなたはパーティーにジョアンを招待したの?  
b. Convidei (ele) **não**. 招待しなかった。
- (7) 否定命令： a. Acho que vou convidar João para a festa. ジョアンをパーティーに招待しようかな。  
b. Convide (ele) **não**. 招待しないで。
- (8) yes-no 疑問文 [Aが帰宅してBがソファに座っているのを見て]  
a. Foi pra aula hoje **não**? 今日は授業に行かなかったの?  
b. Teve aula hoje **não**? 今日は授業がなかったの? (Cavalcante 2012: 32-49)

NEG3 の主な統語的制約に関しては、Cavalcante (2012) 等で指摘するように、wh 疑問文における文否定、ならびに、従属節の文否定では使用できない。(9)は NEG1 を用いた wh 疑問文における文否定の例であり、wh 句は前置、in-situ のどちらも可能である。

- (9) NEG1: a. *O que ele num fez? / Ele num fez o quê?* 彼は何をしなかったの?

- b. *Por que ele num saiu de casa? / Ele num saiu de casa por quê?*  
 どうして彼は出かけなかったの? (Cavalcante 2012: 53)

一方、(10)が示すように、NEG3 を用いた wh 疑問文は、wh 句の位置とは関係なく使用できない。

- (10) NEG3 : a. *\*O que ele fez não? / \*Fez o quê \*não? / Fez \*não o quê?* 彼は何をしなかったの?  
 b. *\*Por que ele saiu de casa não? / \*Saiu de casa por quê não? / \*Saiu de casa \*não por quê?*  
 どうして彼は出かけなかったの? (Cavalcante 2012: 53)

また、(11)で示す NEG1 とは異なり、NEG3 は、(12)で示すように従属節の文否定の意味では使わない。<sup>6)</sup>

- (11) NEG1: Ele disse que num comprou a casa. 彼は家を買わなかったと言った。  
 (12) NEG3: a. *\*Ele disse que comprou a casa não.* 彼は家を買わなかったと言った。  
 (Biberauer and Cyrino 2010: 16)  
 b. *\*Eu imagino que você tem dinheiro não.* あなたはお金がないと思う。(Schwegler 1991: 195)  
 c. *\*É melhor ficar acordado até tarde não.* 遅くまで起きていないほうがよい。(Teixeira de Sousa 2015: 34)

### 3. Cavalcante (2012) の分析: [X NEG] の派生

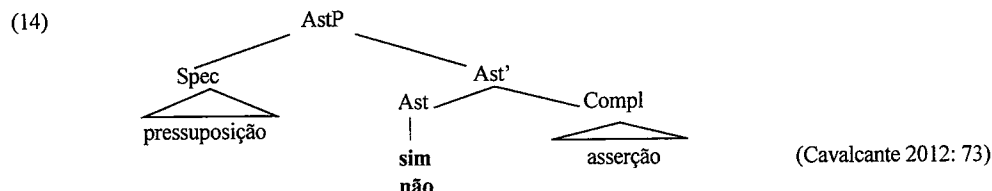
Cavalcante (2012) は、否定辞が否定される要素の右側に現れる形式 ([X NEG]) は照応的否定を表すとしている。X は、談話や文脈で既に導入されている要素であり、照応的特徴をもつとする。そして、否定辞の語順や照応的特徴は CP システムによるものであり、assertive が関係する断定句 (AstP) という機能範疇が関係するという仮説を立てている。また、以下の小節でそれぞれ見るように、NEG3 と構成素否定に対して、断定句が関係する同じタイプの構造と派生を仮定する。

#### 3. 1. NEG3

Cavalcante (2012) は、文末否定辞 *não* が持つ照応的特徴に関して、*sim* や *não* に代表される断定助詞 (partícula assertiva) と共通することを指摘している。以下の(13b)(13c)(13d) は断定助詞の例である。

- (13) a. *Você fez o trabalho?* あなたは仕事をしたの?  
 b. — *Não, (eu num fiz)* いいえ、しませんでした。  
 c. — *Sim, (eu fiz).* はい、しました。  
 d. — *É (eu fiz).* はい、しました。 (Cavalcante 2012: 64)

Cavalcante (2012) によると、断定助詞は断定句の主要部に生成され、談話において既に導入された前提に関する肯定・否定を表す。(14)で示すように、前提を表す要素は、断定句の指定部 (especificador) に現れ、ゼロ形の命題を表す項 (argumento proposicional nulo) が実際に発音される構成素である。



Cavalcante (2012) によると、断定句は先述の命題に関する話者の視点を表し、否定句 (NegP) とは異な

り、文の極性を交えるものではないとしている。断定句の統語的位置については不明な点もあるが、以下(15)で示すように、CP よりも統語的に上位、かつ、主節にのみ生成されとしている。

(15) [As<sub>t</sub>' **não** [CP/FinP C/Fin [TP...]] (Cavalcante 2012: 71)

そして、(13)で挙げた断定助詞 *sim*, *não* を用いた例に関して、それぞれ(16)の構造を仮定する。

(16) a. [As<sub>TP</sub>∅ [As<sub>t</sub>' **sim** [CP [TP eu (num) fiz]]]

b. [As<sub>TP</sub>∅ [As<sub>t</sub>' **não** [CP [TP eu (num) fiz]]] (Cavalcante 2012: 72)

Cavalcante (2012) は、(16)と同じタイプの統語構造を NEG2・NEG3 にも仮定し、NEG2・NEG3 では、断定句の指定部に節 (CP (TP)) が移動するとしている。(17)は NEG3 の例であり、(17b)が示すように、*quero ir* という節が断定句の指定部に移動している。

(17) a. *Quero ir não.* 私は行きたくない。

b. [As<sub>TP</sub> [CP/TP *quero ir*] [As<sub>t</sub>' **não** [CP [TP *quero-ir*]]] (Cavalcante 2012: 74)

2章で見たように、NEG3 は返答、否定命令、yes-no 疑問文で使われるが、wh 疑問文では使用しない。この点で断定助詞も共通する特徴があり、(18)-(21)で示すように、返答、yes-no 疑問文、命令文に対する断定助詞の使用は適切であるが、wh 疑問文に対する断定助詞の使用は不適切となる。

(18) 返答 : A: *Alice acabou de chegar.* アリスは着いたばかりだ。  
 B: **Sim**, eu sei. はい、知っています。  
 B: **É / Não**, num chegou. いいえ、着いていません。

(19) yes-no 疑問文 : A: *Alice já chegou?* アリスはもう着いたの?  
 B: **Sim**, já chegou. はい、もう着きました。  
 B: **Não**, num chegou. いいえ、着いていません。

(20) 命令文 : A: *Vá limpar seu quarto!* 部屋を掃除しなさい。  
 B: **Sim/ É**, vá limpar seu quarto. はい、掃除しなさい。  
 B: **Não**, num vá limpar (agora)! いいえ、(今) 掃除しないで。

(21) wh 疑問文: A: *Quem comprou esse bolo?* 誰がそのケーキを買ったの  
 B: **#Sim / É**, Silvia. はい、シルビアです。  
 B: **#Não**, Silvia. いいえ、シルビア。 (Cavalcante 2012: 80-81)

wh 疑問文に関する NEG3 や断定助詞の特徴について、Cavalcante (2012) は、Farkas (2010) の分析を援用しながら、断定句が必要とする命題の性質によるものと捉えている。断定句は、肯定・否定が関係する完全な命題を必要とするが、wh 疑問文は完全な命題を表すものではない。その結果、断定句に関わる NEG3 と断定助詞は、wh 疑問文の例では不適切になるとしている。

NEG3 と断定助詞に共通するこのような特徴に関して、Cavalcante (2012: 81) は、両者に共通する統語構造があることを示す一つの証拠と捉えている。NEG3 と断定助詞は他にも共通する特徴がある。主節においてのみ使われ、<sup>7)</sup> 音声的な弱化が起こらないという点でもまた共通している。

### 3. 2. 文末満の構成素否定—否定断片、Pseudo-stripping、否定話題

Cavalcante (2012: 324) は、NEG3 の否定辞と同様に、構成素否定で [X NEG] の形式に現れる否定辞は断定句の主要部にあると仮定する。そして、[NEG X] の形式に現れる否定辞は否定句の主要部にあるとし、それぞれの否定辞を異なるものとしている。

(2)-(4)で例示した構成素否定に関して、Cavalcante (2012: 321-323) は、(22)-(24) で示す派生を仮定し、NEG3 の派生(17b)と同様に、否定される構成素が断定句の指定部に現れると仮定する。

(22) 否定断片： Você encontrou João na festa ontem? あなたは昨日パーティーでジョアンに会ったの？

a. *João não.* ジョアンには会わなかった。

b. [<sub>ASP</sub> [<sub>DP</sub> João]<sub>i</sub> [<sub>Asp'</sub> não [<sub>CP/TP</sub> eu encontrei [<sub>VP</sub> ... [<sub>DP</sub> João]<sub>j</sub> ontem na festa.]]]]

(23) Pseudo-stripping: a. João leu D. Quixote, (mas) *Maria não.*

ジョアンはドンキホーテを読んだが、マリアは読まなかった。

b. [<sub>ASP</sub> [<sub>DP</sub> Maria]<sub>i</sub> [<sub>Asp'</sub> não [<sub>CP/TP</sub> [<sub>DP</sub> Maria]<sub>j</sub> leu [<sub>VP</sub> ... D. Quixote.]]]]

(24) 否定話題： a. *Do general não,* as ordens vieram do presidente. 将官からではなく、命令は大統領から来た。

b. [<sub>ASP</sub> [<sub>PP</sub> do general]<sub>i</sub> [<sub>Asp'</sub> não [<sub>CP/TP</sub> as ordens vieram [<sub>VP</sub> ... [<sub>PP</sub> do presidente ]<sub>2</sub>]]]]

(22b)の否定断片と(23b)の Pseudo-stripping では、否定される要素が断定句の指定部に移動し、断定句の主要部 *não* に後続する要素は削除される。また、(24b)の否定話題では、否定される要素が断定句に直接生成される構造を仮定する。<sup>8)</sup>

### 4. NEG3 と構成素否定における違い

3章で見たように、Cavalcante (2012) は、NEG3 と構成素否定において、否定辞の位置と照応的否定という共通する特徴から、両形式に共通する統語構造と派生を仮定し、断定句という機能範疇が関係することを提案している。しかし、NEG3 と構成素否定では異なる特徴もある。

先述したように、Cavalcante (2012) は、wh 疑問文で NEG3 が使用できない理由について、断定句が必要とする命題の性質によるものとしている。しかし、NEG3 とは異なり、構成素否定は wh 疑問文で使用可能な場合もあり、(25)は wh 疑問文で否定断片を使用する例である。<sup>9)</sup>

- |  |  |                   |
|--|--|-------------------|
| (25) a. Não posso falar agora.<br>今は話せない。            | — Por que (é que) <i>agora não</i> ?<br>どうして今は話せないの？ | (I2/I3/I4: OK)    |
| b. Você não pode fumar aqui.<br>ここで煙草を吸ってはいけない。      | — Por que <i>aqui não</i> ?<br>どうしてここはいけないの？         | (I2/I3/I4: OK)    |
| c. Paulo, você não pode entrar.<br>パウロ、あなたは入ってはいけない。 | — Por que <i>eu não</i> ?<br>どうして私はいけないの？            | (I2:OK, I3/I4:??) |

また、従属節の文否定について、Cavalcante (2012: 125) は、断定句は主節にのみ生成されると仮定することによって、NEG3 を従属節の否定に使用しない事実を導き出している。しかし、以下の例が示すように、従属節で構成素否定は使用可能である。(26b)(26c)は従属節で否定断片を使用する例、(27)は従属節で

Pseudo-stripping を使用する例、(28)は従属節で否定話題を使用する例である。

- (26) a. Ele vem hoje? 彼は今日来るの?  
 b. — Parece que *hoje não*. 今日は来ないみたいだ。 (I1/ I2: OK)  
 c. — Maria disse que *hoje não*. マリアは、(彼は) 今日来ないと言った。 (I1/ I2: OK)

- (27) O professor disse que Paulo leu D. Quixote, (mas) *Hamlet não*. (I1/ I2: OK)  
 先生は、パウロはドンキホーテを読んだが、ハムレットは読まなかったと言った。

- (28) a. Paulo disse que *do general não*, as ordens vieram do presidente. (I1/ I2: OK)  
 パウロは、将官からではなく命令は大統領から来たと言った。  
 b. Ela disse que ele é *preguiçoso, incompetente não*. (I1/ I2: OK)  
 彼女は、彼は怠惰であって無能ではないと言った。  
 c. Ela disse que *incompetente não*, ele é *preguiçoso*. (I1/ I2: OK)  
 彼女は、彼は無能ではなく怠惰なのだと言った。

また、2章で見たように、使用域についても違いあり、NEG3 は口語のみに使用されるが、構成素否定は口語のみに限定される形式ではない。そして、NEG3 の使用割合は地域によって異なるが、構成素否定の使用においては、このような地域差はない。

## 5. 考察

前章で示した NEG3 と構成素否定における違いは、断定句を仮定した共通する統語構造からは導き出せないと考える。これらの違いに関して、NEG3 と構成素否定では統語構造が異なる可能性を検討する。

Biberauer and Cyrino (B&C: 2009, 2010) もまた、NEG3 の否定辞と断定助詞 *não* の共通する特徴を挙げ、NEG3 の否定辞を断定助詞 *não* として捉えている。<sup>10)</sup> B&C (2009, 2010) は、断定助詞 *não* と同様に、NEG3 の否定辞 *não* が否定極性表現 (Negative Polarity Item: NPI) を認可できないとしている。(29b)は、NEG3 の否定辞が *um tostão furado* という NPI イディオムを認可できないことを示している。

- (29) a. NEG2: Ele num tem *um tostão furado não!* = ‘He doesn’t have a red cent!’ i.e. He is poor.  
 b. NEG3: Ele tem *um tostão furado não!* Tem um inteiro!  
 ‘He doesn’t have a red cent; he has a blue one!’ (Literal meaning); ≠ ‘He is poor’ (B&C 2010: 2)

*um tostão furado* は、文字通りの意味では「穴の開いた硬貨」であるが、NPI として認可されると「一文無し」という意味を表す。NEG2 の例(29a)では NPI が認可され、「彼は一文無し、貧乏」という意味を表す。一方、NEG3 の例(29b)では、NPI の解釈はなく、「彼は穴の開いた硬貨を持っていない」という文字通りの意味を表し、「彼は貧乏」という意味にはならない。断定助詞の NPI 認可に関しては、(30b)の英語の例が示すように、(30a)の否定辞 *not* とは異なり、断定助詞 *No* は *anything* や *a drop* という NPI を認可できない。

- (30) a. No, I don’t drink *anything / a drop*  
 b. \*No, I drink *anything / a drop* (B&C 2009: 19)

B&C (2009, 2010) は、NEG3 に NPI の解釈がない事実について、断定助詞が NPI を認可できない事実と関連付けている。統語構造上のどの位置に NEG3 の否定辞が現れるかという点については、今後の研究課題としながらも、NEG3 の否定辞は付加詞 (adjunct) として節構造に統合されない要素となっている可能性を示唆している。

NEG3 は口語特有の表現であり、第 2 章で見たように、書き言葉でも使う NEG1 とは異なる統語的特徴を持つ。口語 (Spontaneous Spoken Language) の特徴については、Miller and Weinert (M&W: 2009: 22-23) は、以下のように記述し、口語では書き言葉とは異なるシンタックスが関係することを示唆している。

- (a) Information is carefully staged, a small quantity of information being assigned to each phrase and clause.
- (b) Spontaneous spoken language typically has far less grammatical subordination than written language and much more coordination or simple parataxis.
- (c) The syntax of spontaneous spoken language is in general fragmented and unintegrated; phrases are less complex. A central role in signaling relationships between chunks of syntax is played by deictics.
- (d) The sentence is not a useful analytical unit for informal spoken language.
- (e) The patterns of constituent structure and the arrangement of heads and modifiers do not always correspond to the patterns recognized by syntactic theory.
- (f) The range of vocabulary in spontaneous language is less than in written language.
- (g) A number of constructions occur in spontaneous spoken language but not in written language, and vice-versa.

(g)で「口語に現れるが、書き言葉には現れない多くの構文がある」という言及があるが、NEG3 も口語には現れるが、書き言葉には現れない表現である。そして、上記の口語特有の特徴が NEG3 の統語的特徴に表れていると考えることができる。B&C (2009, 2010) が言及するように NEG3 の否定辞は断片として節構造と結びついている可能性があり、これは、(c)にある口語の特徴と捉えることができる。NEG3 において否定辞が一つの「文」という単位の中に含まれる要素ではなく、NEG3 が一つの「文」構造としてのまとまりにはなっていないために、従属節埋め込みができないと考えることができる。<sup>11)</sup> NEG3 が wh 疑問文で使用できないことも、否定辞が断片的に文と結びついているという NEG3 の統語構造が関係すると考えられる。初期の生成文法では、wh 疑問文について、句構造規則によって生成される深層構造の文に変形規則を適用した結果として派生されるものと捉えている。NEG3 には文構造がないため、wh 疑問文を作る変形規則が適用されないと見ることもできる。M&W (2009) が(d)で言及することと関連するが、NEG3 を一つの「文」という単位とみなす分析では、その特徴が適切に捉えられないと考える。生成文法をはじめとする従来の主な統語分析では、「文」のレベルを基本単位として基底に仮定するが、一つの「文」の単位をなしていない NEG3 のような口語表現に対しては、「文」を基本単位とする従来の統語分析ではその特徴が十分に扱えないと考える。口語表現特有のシンタックスに対して、「文」構造を分析の基本単位として仮定することが正しいのかさらに検討する必要がある、従来の統語分析とは異なるあらたな視点での分析も必要となろう。

NEG3 とは異なり、本稿で扱った 3 タイプの構成素否定は口語に限定される表現ではない。そのため、必

ずしも M&W (2009) が記述した口語の特徴が表れたものとは言えないと考える。Cavalcante (2012) は、ブラジル・ポルトガル語の [X NEG] の形式で表す否定は、文否定の構造から派生されるのではなく、否定句ではなく断定句が関係する点で共通するとしている。断定句は、文の極性を変えるのではなく、先行する命題に対する話者の視点を表す機能を持つとしている。確かに、非言語的な文脈や対人的な場面も関係する断定助詞や NEG3 では、その機能を仮定することで、NEG3 の否定辞を断定助詞と捉えることも妥当性がある。一方、構成素否定は、先に言及された言語形式を否定する場合に主に使われ、意味解釈において非言語的な文脈よりも言語形式に依存する度合いが高く、断定句を持つ話者の視点を表す機能があるとは考えにくい。また、構成素否定の否定辞に対して、NEG3 における否定辞と同様の断定助詞と仮定できるかさらなる検討が必要である。

構成素否定については、個別のケーススタディが必要であるが、基底に文構造があり、「文」という単位から統語操作を経て派生したと捉える分析も可能である。NEG3 とは異なり、従属節や wh 疑問文で構成素否定が使用可能という事実は、構成素否定は文構造から派生されると仮定することによって説明可能である。構成素否定は、句構造規則で生成された深層構造の文に変形規則が適用された結果の表層構造と捉えることもできる。このため、さらなる統語操作である wh 疑問、従属節埋め込みが適用可能と考える。

## 6. 結論

NEG3、構成素否定のどちらも [X NEG] という形式で否定を表すが、wh 疑問文、従属節、使用域における違いから、統語構造が異なる可能性を本稿では検討した。NEG3 は構成素否定とは異なり口語特有の形式であることから、M&W (2009) が記述する口語特有のシンタックスが関係することを考察した。NEG3 の否定辞は断片的に文と結びつくものであり、一つの文構造の中に含まれない可能性があり、これに対して、構成素否定は統語操作の結果として派生可能であることを論じた。そして、NEG3 に対して「文」という統語的単位からの分析が適切でないこともまた論じた。

なお、NEG2 も NEG3 と同様に口語特有の形式であり、wh 疑問文で使用できないという点では共通している。しかし、NEG2 では NEG3 と異なり、従属節で使用可能な場合もあり、NEG3 よりは統語的に使用域が広い。NEG2 と口語特有のシンタックスとの関係については、稿をあらためて考察したい。

ポルトガル語をはじめとするロマンス語の否定形式の統語構造については、カートグラフィック・アプローチによる分析が多い。この場合、Cavalcante (2012) が、断定句という機能範疇を導入しているように、CP システムにあらたに機能範疇を仮定して分析を行っている場合が多い。北イタリアの方言における否定表現は、統語的・意味的特徴に関してブラジル・ポルトガル語の NEG2 と共通点があり、Poletto (2008) では、Ground Phrase、Evidential Modality Phrase という機能範疇を仮定して説明をしている。カートグラフィック・アプローチでは、ロマンス語の変種に限っても様々な機能範疇が仮定されることになり、CP システムが複雑化する傾向にある。これに対して、どの機能範疇がどの言語にも普遍的にあるものと仮定でき



るのかあらためて検討する必要がある。

また、ブラジル・ポルトガル語の断定助詞 *sim*, *não* に関して、Cavalcante (2012) は、(14)の統語構造で示したように、どちらも断定句の主要部に現れる要素として同じ統語位置に仮定している。しかし、Pires and Rothman (2009: 20-21) が言及するように、否定の返答では、以下の例が示すように断定助詞 *não* を使った形式は自然であるが、肯定の返答では、質問に使った動詞を返答にも使う形式が一般的である。そして、動詞の前に断定助詞の *sim* を使うと、強調の意味を付け加えるどころか断定の意味を弱めることもあるとされている。

- (31) Q: Gostou do filme?                      映画は気に入った?  
A: (Sim), gostei. / Não.                      (はい) 気に入りました。 / いいえ

実際に肯定の返答では、*sim* を使わないことも多く、*não* とは異なりオプショナルな断定助詞である。こうした違いから、*sim* と *não* を同様に断定句の主要部と仮定できるのかについても考察する必要がある。

## 註

<sup>1)</sup> Cavalcante (2012) 等の表記に従って、本稿でも適宜 NEG1・NEG2 で動詞の前に現れる *não* を *num* と表記する。

<sup>2)</sup> NEG2・NEG3 に現れる文末否定辞を同じものと仮定できるか、また、NEG2・NEG3 において同様の統語構造を仮定できるかという点に関しては、研究者によって立場が異なるが、本稿では扱わない。Thomas (1969)、Teyssier (1989) 等の文法書では、NEG2 の動詞の前に現れる否定辞を削除することによって NEG3 が派生されるという見方をしている。Biberauer and Cyrino (2009, 2010) は、NEG2 と NEG3 における文末否定辞は異なる特徴を持つとして、文末否定辞の性質や統語的位置も異なるとしている。Hansen (2009) は、NEG2 と NEG3 に現れる文末否定辞の統語的位置や適用される統語操作は同じと考えるが、文末否定辞を持つ素性の解釈可能性に関して違いがあるとしている。

<sup>3)</sup> 否定断片、否定話題ともに、否定辞が否定される構成素の左に現れる [NEG X] の形式も可能であるが、本稿では [X NEG] の形式のみを扱う。Cavalcante (2012) によると、否定断片、否定話題においては、[X NEG] の形式のほうが [NEG X] の形式よりも自然であるということである。

<sup>4)</sup> [X NEG] の形式で表す構成素否定については、Cavalcante (2012) は、本論で例示する3タイプの他に、以下の否定スローガン (slogan negativo) も取り上げて、これらに共通する統語構造を仮定している。

### (i) Preconceito não. 偏見禁止

否定スローガンにおいては、否定辞が否定される要素の右に現れる [X NEG] の形式のみが可能であり、否定される要素は裸の名詞句 (Bare NP) である。否定スローガンは他の構成素否定とは異なる特徴もあるため、個別に分析する必要性が高いと考え、本稿では扱わない。

<sup>5)</sup> (5c)は、筆者が作例し、ブラジル南東部出身のインフォーマントに確認した。なお、ブラジル北東部出身のインフォーマントは、この文脈での(5b) (5c)の使用は適切としている。NEG3 の使用における適切性の判断については、Schwenter (2006: 339: ff3) も、南東部のリオデジャネイロ出身の話者と北東部出身の話者の間で異なる可能性について言及している。

<sup>6)</sup> Cavalcante (2012: 131: ff60) によると、北東部のバイーア州の話者の中には、以下の例で示す従属節の文否定を容認する人もいるということである。

(i) João disse que (Pedro) conseguiu / viajou / comprou **não**.

ジョアンは (ペドロが) できなかった / 旅行しなかった / 買わなかったと言った。

<sup>7)</sup> Biberauer and Cyrino (2009: 22) は、以下の例のような従属節に現れる *sim/ não* について、断定助詞ではなく、pro-sentence negation element として捉え、NEG2 に現れる文末否定辞と同じものとしている。

(i) Acho que **sim / não** 。そうだと思う / そうではないと思う

Cavalcante (2012) では、(i)に現れる *sim/ não* に関する言及はない。

<sup>8)</sup> Cavalcante (2012: 322) は、否定話題の派生については不明な点もあるとし、否定断片や Pseudo-stripping と同様の派生によって生成される可能性もあることを示唆している。

<sup>9)</sup> 4章の用例は、筆者が作例し、ブラジル人インフォーマント4人 (I1, I2, I3, I4) に容認性の判断を調査した。I2 は北東部出身、I1, I3, I4 は南東部出身である。(25)の用例は、3名のインフォーマント (I2, I3, I4)、(26)-(28)の用例は、2名のインフォーマント (I1, I2) に調査した。

<sup>10)</sup> B&C (2009) では、NEG3 の *não* を anaphoric negator としているが、実質的には断定助詞を指す。

<sup>11)</sup> Progovac et al. (2006: 346) も、文になっていない要素 (nonsententials) が従属構造に現れないことについて言及している。

#### 参考文献

- Azevedo, M. (2005). *Portuguese: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cavalcante, R. (2012). *Negação anafórica no Português Brasileiro: Negação sentencial, negação enfática e negação de constituinte*. PhD dissertation, Universidade de São Paulo.  
(<http://www.teses.usp.br/teses/disponiveis/8/8139/tde-09112012-102648/en.php>)
- Biberauer, T., & Cyrino, S. (2009). Negative Developments in Afrikaans and Brazilian Portuguese. Paper presented at CCG 19 (Vitória)  
([http://www.kongresuak.edu.es/p275-content/en/contenidos/informacion/generative\\_grammar09/](http://www.kongresuak.edu.es/p275-content/en/contenidos/informacion/generative_grammar09/))
- Biberauer, T., & Cyrino, S. (2010). The Limits of Jespersen's Cycle in the Romania Nova. Ms. Romania Nova IV Workshop, São Paulo. (<http://www.unicamp.br/iel/romanianova/abstracts>)
- Farkas, D. F. (2011). Polarity particles in English and Romanian. In Herschensohn, J. (Ed.). *Romance Linguistics 2010: Selected papers from the 40th Linguistic Symposium on Romance Linguistics (LSRL)*, 303-328.
- Furtado da Cunha, M. A. (2007). Grammaticalization of the Strategies of Negation in Brazilian Portuguese. *Journal of Pragmatics*, 39(9), 1638-1653.
- Goldnadel, M., et al. (2013). Estratégias alternativas de negação sentencial na região sul do Brasil: análise da influência de fatores pragmáticos a partir de dados do projeto VARSUL. *Revista de Estudos da Linguagem*, 21(2), 35-74.  
(<http://www.periodicos.letras.ufmg.br/index.php/relin/article/view/5102>)
- Hansen, Q. (2009). *Negation in Brazilian Portuguese*, PhD dissertation, University of Florida.
- Miller, J. & Weinert, R. (2009). *Spontaneous Spoken Language: Syntax and Discourse*. New York: Oxford University Press.
- Perini, M. A. (2002). *Modern Portuguese: A Reference Grammar*. New Haven and London: Yale University Press.
- Pires, A., & Rothman, J. (2009). *Minimalist Inquiries into Child and Adult Language Acquisition: Case Studies across Portuguese*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Poletto, C. (2008). The Syntax of Focus Negation. *University of Venice Working Papers in Linguistics*, 18, 179-202.  
(<http://hdl.handle.net/10278/989>).
- Progovac, L. et al. (2006). *The Syntax of Nonsententials: Multidisciplinary Perspectives*. Amsterdam / Philadelphia : John Benjamins.
- Schwegler, A. (1991). Predicate Negation in Contemporary Brazilian Portuguese: a Change in Progress. *Orbis*, 34, 187-214.
- Schwenter, S. A. (2005). The Pragmatics of Negation in Brazilian Portuguese. *Lingua*, 115, 1427-1456.
- Schwenter, S. A. (2006). Fine-Tuning Jespersen's Cycle. In Birner, B. & Ward, G. (Eds.). *Drawing the Boundaries of Meaning: neo-Gricean Studies in Pragmatics and Semantics in honor of Laurence R. Horn*, 327-344. Amsterdam / Philadelphia : John Benjamins.
- Teixeira de Sousa, L. (2015). Three Types of Negation in Brazilian Portuguese. *Lingua*, 159, 27-46.
- Teyssier, P. (1989). *Manual de língua portuguesa*, trans. Margarida Chorão de Carvalho. Coimbra: Coimbra Editora.
- Thomas, E. (1969). *The Syntax of Spoken Brazilian Portuguese*. Nashville: Vanderbilt University Press.